

(5) 整形外科

概要、特色

整形外科は運動器の病気やケガを取り扱う診療科であり、その取り扱う範囲は骨、関節、靭帯、脊椎・脊髄、手足の神経および筋肉と多岐に渡っている。そのなかでも我々小児整形外科医は、運動器の成長による変化を考慮して治療を行うということが大きな特色である。体の成長に伴う運動器の形の変化、身長・体重の増加による運動器への負担の増加といった点を念頭に置いて、運動器の疾患が患児の成長発達の妨げにならないように治療を計画していくことになる。このため、外来での経過観察を含めた治療期間が長くなることと、その中で手術を含めた特殊な治療を行うべき時期が成長発達にあわせて決まってくるのが問題となる。

具体的な疾患としては、先天性股関節脱臼、先天性内反足、先天性筋性斜頸といった代表的な小児整形疾患のみならず、骨形成不全症、軟骨無形成症、多発性外骨腫、骨端異形成症、くる病などの先天性および後天性骨系統疾患、二分脊椎、脊椎側弯症などの脊椎疾患、脳性麻痺による四肢の変形や分娩麻痺などの神経障害、良性および悪性骨腫瘍に代表される腫瘍性疾患、若年性関節リウマチ、単純性股関節炎などの炎症性疾患、ペルテス病、オスグット病などに代表される骨端症などの治療が主なものであるが、これら以外にO脚、X脚などの下肢のアライメント異常の相談や治療、先天性の脛骨欠損、大腿骨形成不全といった四肢の先天性骨欠損ないしは形成不全、化膿性関節炎や骨髄炎、骨折などが治癒した後の異残変形や成長障害に対する再建なども取り扱っている。

診療活動

(a) 外来診療(図1)

平成14年度は、病院の移転にともないそれまで診療活動が制限されていたため、多数の外来患者様が診療を希望されておられたが、坂巻医長の病休なども重なり1日に診ることのできる患者数に限りがあり、予約が入らない、予約が入っていても時間通りに診てもらえないなどのご迷惑をおかけした。さらに整形の疾患は、診察後にレントゲン撮影を行って、骨の状態を評価しなければならないことが多く、レントゲンのできあがり時間に診察を行う時間が左右されるため、なかなか予定時間に診療を行うことが困難であった。

診療体制としては、月曜日から金曜日までの毎日午前中を外来診療にあてており、火曜、木曜、金曜には装具外来も行っている。また、月・金の午後は特殊外来をおこなっている。

1日の外来患者数は、平成14年度では平均20名であるが、この数は、診察後にレントゲンを含めた検査を行い、その結果をもとに治療方針を決定することを考えると、とても午前中に処理することが不可能な人数である。しかしながら、診療を希望する患者数から考えると1日20人でもまったく足りず、この処理能力の改善が今後のもっとも大きな課題といえる。特に冬休み、春休み、夏休みといった学校が長期休暇となる時期の患者の集中はどこの科でも問題であると考え、整形外科でも通常業務を行うことが困難なほど集中し、早急な対策を必要としている。

(b) 入院(図2)

入院患者に関しては、開院当初0からのスタートだったわけであるが、骨折の牽引治療や慢性疾患の保存療法から入院治療を開始し、6月以降は、手術も開始したことから常時15名以上が入院している状態である。また、これらの整形固有の患者以外に、救急関連での骨折等の併診患者や多発奇形の併診患者を常時5~6名加療している。

(c) 検査および手術(表1)

全身麻酔を必要とし、手術室で行ったMRI検査が10件あり、脊髄病変4例、腫瘍性疾患4例、その他2例であった。同様に全身麻酔を必要とし、手術室で行った関節造影検査が9件あり、先天性股関節脱臼8例、化膿性股関節炎の遺残変形1例であった。

手術に関しては、開院当初、手術室の問題、手術機械の問題などで手術が行えなかったため、4月

の2件が最初であるが、5月以降はコンスタントに予定手術を行い、計93件の手術を行った。主な手術の内訳としては、化膿性股関節炎での重度の関節破壊に対しての大転子を用いた股関節形成術（ワイスマン手術）2例、同じく化膿性股関節炎後の遺残変形に対する大腿骨骨切り術1例、先天性股関節脱臼後の遺残変形に対する骨盤骨切り術2例、先天性下肢形成不全などでの股関節変形に対する寛骨臼回転骨切り術2例、麻痺性股関節脱臼などに対する大腿骨骨切りと観血的整復術の合併手術2例と、股関節周囲の手術が多かった。脚長不等や四肢の変形に対する骨延長関係の手術は13件、内反足手術は7件行った。膝周囲では、脛骨列欠損に対する膝関節形成手術（腓骨中心化手術）2件、習慣性膝蓋骨脱臼に対する観血的整復術1件など計5件の手術を行っている。それ以外では、骨形成不全症の骨変形に対する矯正骨切りとロッドの挿入を2件、総排泄腔外反症に対する骨盤の手術を2例3件行っている。しかしながら、現在に経っても手術は、数ヶ月待ちの状態であり、外来診療とのかねあいでも手術時間をいかに確保するかが今後の課題である。

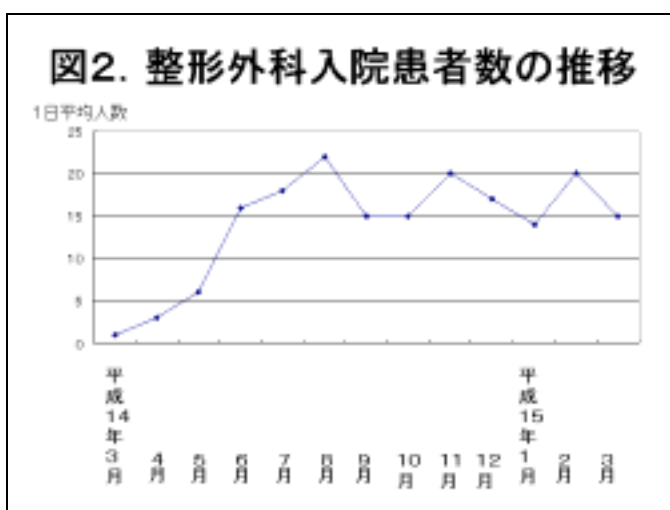
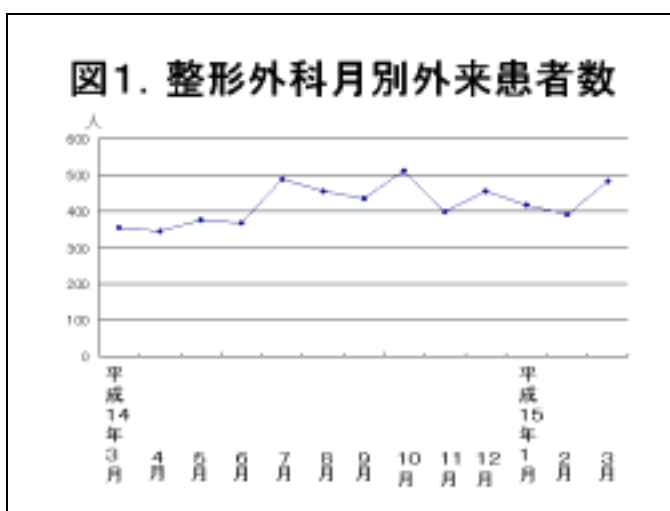


表1. 主要手術件数

先股脱関係	内反足手術	骨延長関係	関節形成術	筋性斜頸	外傷
14	7	13	4	2	7